



えと文／徳地 弘好

石 仏

その多くは名もなく、野ざらしのまま
で、ときには、けっしてできのいいと思
えないものもある。しかしこのことが同
時に、私の足をふらりと出向かせるこ
ろとなる。

信楽の里へ向かう大門川沿いの道を、
草津方面に折れ、金勝寺から竜王山、鵜
冠山の奇岩の多い峯道を行くと、やがて
道なき道となる。どっかり腰をおろした
ところ、真正面の大きな重ね岩から、気
づかない程薄い彫りの磨崖仏が私の目に
現われたのは、まったく思いがけないこ
とであった。とりわけ私の印象深いもの
に、兵庫・北条町にある五百羅漢があ
る。大胆素朴にして活き活きしているさ
まは、昔を偲ぶというそんな仏の姿では
なかった。それがほとけであり、庶民信
仰のあらわれであり、あるいは、その謂
れや様式の変遷などなど私にはさして関
心のないことである。ただ、この石によ
る造形が私の心に強く触れるのは、私な
りの見方で、まぎれもない人型（ひとか
た）として映るからに他ならない。

（昭42大経卒）